

学会記事

日本古生物学会 (2011・2012年度) 第5回定例評議員会議事録

日時：2013年6月27日(木)9:30～13:00

場所：熊本大学工学部1号館会議室B

出席：間嶋会長，安藤，遠藤，井龍，加瀬，北里，北村，近藤，前田，真鍋，松岡，西，小笠原，大路，佐々木，佐藤，生形

欠席：天野（→間嶋），平山（→大路），甲能（→真鍋），棚部（→佐々木），富田（→佐藤），植村（→加瀬），矢島（→遠藤），柳沢（→安藤）

書記：土屋，大橋（和仁代理）

事務局：原田

報告事項

常務委員会報告（北村）

庶務（北村）

1. 北海道深川市教育委員会生涯学習課から化石データベースについての問い合わせがあり対応した。
2. 日本学術振興会から通知のあった「日本学術振興会賞受賞候補者の推薦について」を評議員メールで回覧したが、推薦はなかった。
3. 柄沢宏明君から、Taylor, R. S., Schram, F. R. & Yan-Bin, S., 1999. A new crayfish family (Decapoda: Astacida) from the Upper Jurassic of China, with a reexamination of other Chinese crayfish taxa. *Paleontological Research*, 3(2)のFigure 8Aの転載許可願（予定転載先：Feldmann, R. M., C. E. Schweitzer, and H. Karasawa. In preparation. Part R, Revised, Volume 1, Chapter 8J: Systematic Descriptions: Infraorder Astacidea. *Treatise online*）があり、これを許可した。
4. 生痕研究グループ・佐渡ジオパーク推進室から、Ogasawara, K. and Nakagawa, K. 1992. Tropical molluscan association in the middle Miocene marginal sea of the Japanese Islands: an example of molluscs from the Oyama Formation, Tsuruoka City, northeast Honshu, Japan. *Transactions and Proceedings of the Palaeontological Society of Japan, New Series*, 167. 1224-1246.のFigure 5.の転載許可願（予定転載先：生痕研究グループ・佐渡ジオパーク推進室，佐渡島平根崎の下戸層から産出する生痕化石）があり、これを許可した。
5. 日外アソシエーツ株式会社から「最新科学賞事典2008-2012」の刊行につき、本学会の賞に関する資料等提供の依頼があり、学会HPの資料を紹介した。
6. 第26回国際鳥類学会議（IOC2014）実行委員会から後援依頼があり、承諾書を送付した。
7. 日本学術振興会から依頼のあった「育志賞の推薦について」を評議員メールで回覧したが、推薦はなかった。
8. 2013・2014年度日本古生物学会評議員の選挙投票用紙を発送した。
9. 化石友の会幹事から、石垣 忍君，犬塚則久君，兼子尚知君，重田康成君，椎野勇太君，仲谷英夫君，林 広樹君，横山 隼君に、「化石友の会」の入会勧誘パンフレットに掲載する画像の使用の承諾依頼があり、承諾依頼書を送付した。
10. 「地質科学国際研究計画（IGCP608）」から後援依頼があり、承諾書を送付した。

11. 事務局に科研費（研究成果公开发表（B）不採択の通知があった。不採択の所見は「恐竜については多くの人が関心をもっており、特に小中学生に地学への興味を持たせるのに格好の材料であるのに、高校生以上を対象にした講演会である点が残念である。より低年齢層への啓発活動を考えてほしい」であった。
12. 日本地質学会第120年学術大会巡検協賛の依頼があり、承諾書を送付した。
13. 2013・2014年度評議員選挙の開票を静岡大学で、5月12日10:30～17:30に行い、25名の当選者が確定した。5月10日(金)までに返信された投票用紙350枚。うち、無効票は無し。全ての○の数6254個。当選した方は以下の通り（あいいうえお順）。
天野和孝，安藤寿男，入月俊明，井龍康文，生形貴男，遠藤一佳，大路樹生，加瀬友喜，北里 洋，北村晃寿，甲能直樹，小林快次，近藤康生，佐々木猛智，佐藤たまき，富田幸光，中島 礼，奈良正和，西 弘嗣，平山 廉，前田晴良，間嶋隆一，松岡 篤，真鍋 真，矢島道子。
14. 評議員選挙開票に際して、静岡大学の学生9名をアルバイトとして雇用した。
15. 5月19日～24日に日本地球惑星科学連合大会の学協会ブースに出展した。
16. 評議員に「H26 科学技術分野の文科大臣表彰科学技術省及び若手科学者賞受賞候補者」の推薦を依頼した。
17. 日本第四紀学会から「国際第四紀連合（INQUA）第19回大会」の共催依頼があり、承諾書を送付した。
18. 本会名誉会員速水 格君の葬儀に弔電と生花を手配した。
19. 群馬県立自然史博物館の木村敏之君から第43回企画展「甦れ！カミツキマッコウ 古代ゾウ～関東に眠る太古の生きものたち～」の後援依頼があり、承諾書を送付した。
20. 土屋正史君から、Kiyotaka Chinzei. 1986. *Paleontological Society of Japan, Special Papers*, no. 29のText-fig. 2の掲載許可願（転載先：Tsuchiya *et al.*, *Experimental Approaches in Foraminifera: Collection, Maintenance and Experiments*, Springer Japan. (予定)）があり、これを許可した。
21. 学会MLに日本学術会議地球惑星科学委員会大学教育問題分科会「学士課程教育における地球惑星科学分野の参照基準」の開催について配信した。
22. 新潟大学学術情報基盤機構旭町学術資料展示館から企画展示「微化石展」の後援依頼があり、承諾書を送付した。
23. 生物科学連合緊急声明（「日本版NIH」構想における資源配分と人材育成プロセスへの懸念）に関して、日本分類学会連合（加盟25団体）が賛同の意志を表明したため、分類学会連合に属する日本古生物学会も、この緊急声明に会長名で賛同の意志を伝え声明書に掲載された。
24. 会長から、速水 格名誉会員告別式において、予定していた弔辞を、葬儀等の予定により見送ったとの報告があった。
25. 静岡県に寄託している学会図書について、静岡県との契約期間は2年間とし、図書は閲覧・貸し出しを可とすることとした。

渉外（真鍋）

1. UniBioと申請した科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（国際情報発信強化）が、今年度のみの採択となった。
2. 科学研究費助成事業として、*Paleontological Research* Vol.17のNo.1からNo.4の掲載論文に引用された論文の著者に、引用されたことをメールで伝えるシステムを試験的に導入することとなった。

会計（佐藤）

1. 会計監査を平成25年6月19日に実施した。
2. 税理士（新創パートナーズ税理士法人）との1年間の顧問

契約を交わした。

3. 友の会パンフレットの印刷が、今年度の予算執行に間に合わないため、来年度の予算で支出することとした。

行事（佐々木）

1. 第162回例会（横浜）例会の実績・会計報告：参加者350名，収入847,000円，支出は275,865円で，915,305円を学会へ返納した。
2. 普及講演会「化石と現生生物から分かる相模湾の大規模環境変動」(科研費（研究成果公開発表（B）によって実施）の参加者は159名。
3. 熊本年会の準備状況：口頭77件，ポスター41件，一般講演合計118件。このほか，学術賞受賞特別講演1件，シンポジウム6件，高校生ポスター4件。

広報・企画（大路）

1. 学会出版物のウェブ上での公開を進めている。
2. 会員データベースを稼働するため，3月下旬に事務局より「大切なお知らせ」（データベース始動とID，PWの送付，入力情報の確認のお願い）を各会員に郵送した。
3. 熊本年会での高校生ポスターセッションにむけて，熊本県，鹿児島県，宮崎県などの高校関係者に周知を進め，4件の高校生ポスターセッション（一部中学生を含む）の参加申し込みがあった。
4. 2013年3月29日より学会員データベースを始動した。
5. 学会員データベースに，会員各自の会費納入状況が確認できる機能，および検索機能を追加した。

国際交流（遠藤）

1. IPA年会費を送金した。

友の会（近藤）

1. 新規入会者3名（合計107名），うち1名は直後に古生物学会会員となったため，友の会を退会した。新規入会者の入会動機は，ホームページの閲覧による割合が高い。
2. 熊本年会において，化石友の会の会員を対象とした企画を実施予定。内容は熊本大学の古生物研究室の見学を行う（6月30日（日），学会の一般講演終了後1時間程度を予定）。
3. 化石友の会の入会案内パンフレットを博物館などでの展示会等で配布予定。

電子ジャーナル（真鍋）

1. アジアでの電子ジャーナル販売を強化するため，現在行っているBioOneと平行して，iGroup社を通じてUniBioをアジアで公開する準備を開始した。

会員の入退会報告および会費割引の報告（前田）

1. 前回の評議員会（2013年1月24日）以降，入会29名（田邊佳紀君，青木秀人君，ルグラン・ジュリアン君，松井浩紀君，水本楓華君，富中真悟君，植原和樹君，武内健二郎君，相場大佑君，佐々木智啓君，佐々木圭一君，戸田悠宇君，関口修司君，蘇綾君，田近周君，浦野雪峰君，今井拓哉君，吉田将崇君，本田栄喜君，佐藤裕一郎君，久保田好美君，知念幸子君，原康祐君，白井孝明君，間宮隆裕君，黒須球子君，諸隈暁俊君，三宅由洋君，内村仁美君），退会21名（中村泰之君，大河原仁美君，上田直人君，八田明夫君，安井敏夫君，中島秀一君，安西航君，岡田大爾君，黒滝啓介君，島崎哲也君，鹿島愛彦君，野呂美幸君，宮原哲仁君，松丸国照君，安井金也君，二階堂崇君，末包鉄郎君，牛村英里君，宮下博幸君，清野聡子君，都郷義寛君），逝去3名（河野通弘君，速水格君，黄敦友君）があった。会員歴の長い元会員の逝去1（大村明雄氏）があった。会費未納の会員22名を，2013年3月30日付けで除籍とした。2013年6月27日現在の会員数は1,035名（前回評議員会比-24名）である。
2. 前回の評議員会（2013年1月24日）以降，15名の学生会

費割引の申請（松井浩紀君，水本楓華君，植原和樹君，相場大佑君，田中嘉寛君，戸田悠宇君，田近周君，吉田将崇君，浦野雪峰君，田原瑠衣君，千葉謙太郎君，白井孝明君，間宮隆裕君，内村仁美君，諸隈暁俊君）と2名のシニア会費割引の申請（沖村雄二君，菅野耕三君）を承認した。

3. 学生会費割引制度の運用の改定について
事務局の作業量の軽減のため，学生会費割引制度の運用の改定を了承した。詳細は以下の通り。

受付：

<現行>：「入会申込書」と「学生会費割引申請書」のみでも受け付ける。

<改訂後>：「入会申込書」，「学生会費割引申請書」，「自動振込利用申込書」の3点セットを揃えて申請。この要件を満たさない限り，正式な申請とは認めない。

入会との同時申請：

<現行>：随時。

<改訂後>：4月～1月末（例会終了時）まで受け付ける。例会終了時～3月の期間は受け付けない（割引申請は次年度回し）。

編集状況報告

欧文誌（西）

1. 出版状況
 - Vol. 17, no. 1 を発刊。
 - Vol. 17, no. 2 を校了。
 - Vol. 17, no. 3 の第2稿に入っている段階であり，8月に発刊予定。
 - Vol. 17, no. 4 以降には受理原稿が6編。これで発刊予定。
 - 2012年からの受理原稿は38編，査読中が11編，著者修正中が7編，拒否10編あった。
2. Vol. 16, no. 4 を事務局に納品される際に，運送業者とトラブルがあった。印刷会社に抗議し，謝罪状を受けとった。
3. 新潟県加茂市教育委員会より Vol. 16, no. 4 の100部の購入依頼があり，追加印刷し，送付した。
4. 学術図書からレタープレスへの印刷所の移行は順調である。
5. Supplement への投稿について問い合わせがあり，対応した。
6. Web of Science の Journal Citation Reports が更新され，PR の Impact Factor が0.70 と掲載された。

化石（生形）

1. 93号を3月末に刊行。口絵1編，論説1編，解説2編，特集（東日本大地震における標本レスキュー活動）原稿10編，書評1件，学術集会参加報告3件。印刷費1,092,000円。
2. 94号以降の編集状況は，論説3編（受理2，受付1），解説1編（受理），追悼文3件（受付1，準備中1，依頼予定1）。依頼予定の追悼文1件については，著者を検討中。

特別号（遠藤）

1. Supplement に投稿予定の原稿があり，PR の投稿システムを利用することを予定。Supplement を出版する時期と予算を検討中。

連合・学術会議報告

地球惑星科学連合（西・間嶋・遠藤）

1. JpGU ジャーナル「Progress in Earth and Planetary Science」の編集委員会（6月7日，東大）があった。2014年1月の発刊予定で，2013年8月から原稿を集め始める。当面の2年間の編集は，3人程度の総編集長，五つのセクションごとの編集委員で行う。編集委員として遠藤一佳君と井龍康文君が参加。
2. 2014年連合大会の会場はパシフィコ横浜に変更になり，参

加料が値上げされ、5月連休前半に開催される予定。なお、2015年連合大会は幕張メッセで開催。

3. 日本古生物学会会長が2015年度の学協会長会議議長に選出されたため、来年度の日本地球惑星科学連合大会の実行委員長は、本会会長となる。
4. 地球惑星連合とAOGS合同大会（古生物分野を含む領域）が、2014年7月に札幌で予定されており、セッション提案が2013年後半から開始される。

学術会議（大路・西・北里）

1. 自然史標本の文化財化が検討されており、標本のリストアップなどの基礎データの収集などの準備が開始される。
2. 22期学術会議において、大型科学研究マスタープランの改訂が行われており、次の3件がヒアリングを受けている。
 - 1) 自然史科学のイノベーションを目指す国立自然史博物館の設立（統合生物委員会）、
 - 2) フルデプス有人潜水調査船開発と超深海海溝生命圏探査計画（統合工学委員会）、
 - 3) 掘削科学を用いた全地球システムの解明（地球惑星科学委員会）。
3. 学術会議と各学協会との連携に関して、地球惑星連合を通じて夢ロードマップの改訂を今秋に行う。
4. 地球惑星科学委員会大学教育問題分科会「地球科学教育に関する参照基準（案）へのパブリックコメント（7月15日締め切り）への積極的コメントが要請された。
5. 学術会議の機能強化として、1) 各学協会との連携、2) 会員・連携会員の選考基準を検討中。

自然史学会連合（大路）

1. 自然史科学の分野横断的な一般向け書籍「自然史の散歩道」を編集。7巻67編を予定しており、来年前半には出版予定。日本古生物学会から編集委員として伊佐治鎮司君が参加。
2. 平成25年度の自然史学会連合の講演会は、沖縄で開催予定。

分類学会連合（佐々木）

1. 1月11日に分類学会連合のシンポジウムが国立科学博物館（上野）で開催予定。

各種委員会報告

将来計画委員会（西・遠藤）

IPC5招致検討委員会（遠藤）

1. IPC5の招致を会長に上申した。
2. 福岡、大阪、滋賀、名古屋、横浜、東京、仙台、札幌を開催候補地とした。
3. 大学で開催の場合、400万円ほど安くなるが、学会予算があるため、国際会議場を使う予定。

被災博物館レスキュー委員会（真鍋）

1. 陸前高田で腕足動物の分類（10月末時点で1000点以上）を行い、リストを作成中。

学会賞（横山賞）選考委員会（間嶋）

1. 第4回定例評議員会での発議を受け、評議員会で選出された棚部一成君、北里 洋君に加え、高柳洋吉君、猪郷久義君、速水 格君、鎮西清高君、斎藤常正君、間嶋隆一会長（委員長）で委員会を構成した。
2. 審議の結果、全員一致で加瀬友喜君を学会賞（横山賞）受賞候補者として評議員会に推薦することとした。

その他

タイプ標本のデータベース化について（小笠原）

1. 新生代のサンゴ類、古生代の腕足動物のタイプ標本のデータベースについて完成する予定なので、特別号またはSupplementで出版を検討している。

地質科学国際研究計画（IGCP608）について（安藤）

1. アジア白亜紀の地質系の研究の国際研究プロジェクト「白亜紀のアジアー西太平洋地域の生態系システムと環境変動（白亜紀アジアー西太平洋生態系）のミーティングが2014年日本（東京・早稲田大学）で開催される。

事務局（原田）

1. 2013年度会費自動引落の時期を、本年度より4月10日に変更。

審議事項

特別会員候補者の推薦

大和田正人君、石村豊穂君、足立奈津子君、Robert G. Jenkins君、安原盛明君、尾上哲治君、藤原慎一君、奥村よほ子君、村上瑞季君、東田和弘君、若山典央君、中尾有利子君、土屋 健君、上栗伸一君、一島啓人君、堂満華子君の計16名を特別会員候補に推薦した。会員資格変更を受諾するかどうか本人に確認する。

名誉会員の推戴

小池敏夫君、森 啓君を名誉会員として推戴し、総会に諮ることとした。

第163回例会シンポジウム案について

第163回例会シンポジウム案「古生代化石に関わる最近の研究動向（仮）世話人：小林文夫君、古谷 裕君、竹村厚司君」を承認したが、開催趣旨について、各講演の横断的な内容を考慮した具体的な内容への修正と、趣旨に合わせたタイトルの再検討を世話人に依頼することとした。

第163回例会への開催補助金の申請について

開催実行委員会からの開催補助金の申請（379,217円：内訳はアルバイト経費334,217円、参加者200名としたときの入館料30,000円、お茶等10,000円、郵送費等雑費5,000円、ただし1月26日（日）午前まで開催される場合には人件費分25,210円が追加）について審議し、これを承認した。

2014年年会・総会開催地の決定

2014年年会・総会を九州大学総合研究博物館（箱崎キャンパス）で2014年6月27日（金）～29日（日）に開催することとした。

PRカラーページチャージについて

カラーチャージ（3万円／ページ）の案内について、投稿規定ではなく、A Guide for Preparing Manuscriptsに加筆することとした。

PR誌のDOI表記について

現状はページ数になっているため、原稿番号にすることを確認した。

PR Supplementの出版

PR Supplement出版のために、不定期出版物刊行基金の解約を必要に応じて行うことを承認した。

2012年度決算について

2012年度決算案を承認し、総会に付議することとした。当期の収入は14,375,791円、支出は14,579,236円（このうち学会基金繰入支出は、1,601,594円）、当期の収支差額は、203,445円の赤字である。

ウェブを通じた年会・例会申し込みシステム導入

「なかまシステム」を用いた学会講演申込み、カテゴリ選択、口頭・ポスター・シンポジウムの区分、懇親会申込みについて検討し、これを承認した。兵庫例会に向けて実施する予定である。

IPC5の招致

1. IPC5（2018年6～7月、9月を予定）の招致を決定した。ICP4（2014年アルゼンチン）で立候補する。
2. 招致委員会を新評議員会で立ち上げ、新会長が指名する

開催委員長と新会長、会計がメンバーになることを一任することとした。

3. 招致委員会は、会場候補地の資料を第163回例会までに準備することとした。

学会賞（横山賞）受賞者について

加瀬友喜君に、学会賞（横山賞）を授与することを決定した。授与は2014年総会の際に行うこととした。

次期評議員会への申し送り事項の確認

次期評議員会への申し送り事項を下記の通り確認した。1) 学会基金の使途計画の立案、2) 外部団体各賞の推薦依頼に対して、より積極的な推薦を行える方策の検討、3) 学会誌（PR、化石）電子版の直近1年分の閲覧制限の解除の検討。

日本古生物学会2013・2014年度 第1回定例評議員会議事録

日時：平成25年6月27日(木)13:30～16:20

場所：熊本大学工学部1号館会議室B

出席：安藤、遠藤、平山、井龍、加瀬、北里、北村、甲能、近藤、前田、間嶋、真鍋、松岡、中島、西、大路、佐々木、佐藤、生形

欠席：天野（→間嶋）、入月（→井龍）、小林（→佐藤）、奈良（→近藤）、富田（→真鍋）、矢島（→遠藤）

途中退席（14:50）：前田（→北村：賞の委員半数改選以降）

書記：土屋、大橋（和仁代理）

事務局：原田

審議事項

会長選挙

選挙の結果、新会長に大路樹生君が選出された。

前評議員会からの申し送り事項の確認

前評議員会からの申し送り事項を下記の通り確認した。1) 学会基金の使途計画を早急に立案する、2) 学会に毎年送られてくる外部団体各賞について、より積極的な推薦を行える方策を検討する、3) 最新学会誌1年分の閲覧制限の解除の検討を進める。

常務委員の選出

選挙の結果、10名の常務委員を選出した（敬称略）：井龍、生形、遠藤、北村、佐々木、佐藤、中島、西、前田、真鍋。第1回常務委員会を開催し、次の通り各係を決定した。庶務：北村、国際交流：遠藤、会計：佐藤、行事：佐々木、会員：西、渉外：真鍋、企画・広報：中島、欧文誌編集：井龍・生形、特別号編集：井龍、「化石」編集：前田、電子ジャーナル：真鍋。

会計監査の選出

重田康成君に依頼することとした。

将来計画委員の選出

将来計画委員の選出を会長に一任することとした。

被災博物館レスキュー委員の選出

真鍋君が引き続き被災博物館レスキュー委員長となることを決め、具体的な委員については、会長と真鍋君に一任した。

賞の委員の半数改選

奈良正和君、長谷川四郎君の2名を選出した。非改選の2名は、佐藤たまき君（幹事）、延原尊美君である。

ポスター賞選考委員の選出

甲能君（委員長）、加瀬君、北里君、間嶋君、西君の5名を選出した。

2013年度事業計画・予算案

2013年度事業計画案および予算案を承認し、総会に付議することとした。収入を11,890,000円、24年度繰り越し4,601,583円、支出を16,491,583円とした。

IPC5の招致について

1. 招致委員会の委員長を遠藤君とし、会長、会計が中心となり、近日中に招致委員メンバーを決めることとした。
2. IPC4において、発表を行う若干名の若手研究者の旅費を学会から援助することを決定し、総会・HP・化石誌上等で周知することとした。募集要項に記載する金額・人数・選定方法は、IPC3などの前例を参考にしつつ、常務委員会で実務を詰めることとした。秋頃に募集要項を発表予定。積極的な発表を促す。

総会議事の確認

総会の議事次第を確認した。

その他

従来、開催校が負担していた受賞者に関する経費の一部を学会が負担することとした。

2013年度総会

2013年6月28日(金)16:30～17:40、熊本大学百周年記念館で開催された。出席81名、委任状33名の計114名が参加（定足数104）。議事次第は以下の通り。

1. 開会
2. 会務報告
 - ・2012年度会員動向：入会47名、退会28名（うち逝去4名）、除籍22名、2013年6月27日時点で1,035名。
 - ・行事関連：2012年年会・総会（名古屋大学）と162回例会（海洋研究開発機構・横浜国立大学）の報告、次回例会（兵庫県立人と自然の博物館）の予定。
 - ・学会誌：PRインパクトファクター、「化石」投稿規定の条文追加。
 - ・企画・広報：ウェブを通じた年会・例会申し込みシステム導入。
 - ・2018年のIPC5（5th International Palaeontological Congress）日本招致に向けての立候補。
 - ・評議員選挙結果、新年度会長・常務委員
3. 地球惑星科学連合、日本学術会議、自然史学会連合報告
4. 名誉会員の推戴：小池敏夫君、森 啓君
5. 学術賞・論文賞・貢献賞の授与
 - 学術賞：重田康成君、田中源吾君、松原尚志君
 - 論文賞：西田 梢・中島 礼・間嶋隆一・疋田吉識君、千徳明日香・江崎洋一君
 - 貢献賞：太田正道氏
6. 2012年度決算案報告
7. 2013年度事業計画および予算案
8. 閉会。

各賞贈呈文および受賞ポスター

2012年度日本古生物学会学術賞

重田康成君：有殻頭足類の分類学的・層序学的研究

重田康成君は、詳細なフィールドワークと、卓越した標本処理技術を活かして、おもに中生代の化石有殻頭足類の研究で大きな成果を挙げた。

まず重田君は、最も進化したタイプの初期縫合線を持つ白亜紀アンモノイド：テトラゴニテス属に着目し、胚殻の浮力計算を行うと同時に、層序分布や形態、発生初期の殻体構造を詳細に観察した。その結果、初期殻体内部構造には分類群ごとに特徴があることを明らかにし、それを用いて系統を復元する糸口を見いだした。現在では、共同研究者とともにさらに研究を進め、古生代のプロレカニテス目と三疊紀のセラタイト目との初期殻体構造の類似性を指摘し、また三疊紀末期からジュラ紀初期におけるアンモナイト亜目の起源や進化について独自の見解を示すなど、大量絶滅で化石記録が途切れた大グループ間の系統復元に重要な知見を提供した。

一方、国内外のフィールドに出かけて詳細な地質調査をおこない、精度の高い層序対比に基づいてアンモノイド類の古生物地理や進化史、さらには地球史の解明を目指すアプローチを進めたのも重田君の大きな功績である。例えば、戦後初めて実施された極東ロシア地域の白亜系の海外学術調査では、1990年の第1回から中心メンバーとして参加した。そして模式層序のあるサハリン・ナイバ地域にとどまらず、マカロフ地域、クリリョン地域、カムチャッカ地域など前人未踏の奥地にも足を踏み入れて詳細な調査を行い、その成果を順次公表している。とりわけ、古地磁気層序や同位体層序の研究者と協力して、これまで対比が困難であった白亜系最上部（カンパニアン階－マストリヒシアン階）の統合層序対比を試みた点は特筆される。これまで注目されなかったゴードリセラス科の属種を用いて西南日本、北海道、サハリン、アラスカをまたぐ広大な地域間で下部マストリヒシアン階を精密に対比しうる新しい枠組みを提示したことがその好例である。白亜系最上部の層序対比は重田君のライフワークのひとつであり、今後のさらなる成果が期待される。

次に重田君は、古生物学的に重要であるにもかかわらず、未踏査に近い状態で残されている三疊系セクションに着目した。例えば、極東ロシア・沿海州の下部三疊系は、軍事的要衝にあるために約100年間にわたって海外研究者が足を踏み入れることが許されなかった地域である。重田君は、諸外国に先駆けて1998年以来十数回にわたってロシアの研究者と下部三疊系の共同調査を行い、大量絶滅後のアンモノイドやオウムガイ等の海生無脊椎動物化石相の変遷に関する重要な成果を挙げた。これまでP/T境界後の生態系の回復は、おもに石灰岩プラットフォームを舞台にして議論されてきた。これに対し、厚い碎屑岩相という極東ロシアのセクションの地質学的特色を活かして調査を重ねた結果、共同研究者とともに90種以上を記載し、P/T境界後の碎屑岩相動物相の解明に大きく貢献した。

これらの海外調査の成果は、それぞれ2005年（サハリン上部白亜系）と2009年（極東ロシア下部三疊系）に国立科学博物館モノグラフとして出版された。その際、重田君は著者としてだけでなく、各分野を束ねる責任編集者としてリーダーシップを発揮した。この2冊のモノグラフは国際誌の書評欄で取り上げられ、内容・体裁の両面で賞賛されるなど、日本の研究・出版のレベルの高さを海外に示すことにも貢献している。

重田君の研究成果を論ずる際、もうひとつのライフワークである白亜紀テトラゴニテス上科の分類学的研究にも触れなければならない。このグループは汎世界的に分布し、白亜紀のアンモノイド類の進化や古生態を考える上で非常に重要な位置を占めている。しかし、殻形態が単純で分類形質に乏しいため、信頼のおける分類形質の評価が待たれていた。重田君は、前記の初期殻体内部構造の研究やフィールド調査のデータ、さらに世界各地の研究機関でのタイプ標本観察など幅広い視点からこのグループの分類を見直した。その結果、1) 日本では無名だったシュードフィリテス属が、カンパニアン期

後期に北太平洋に分布を拡大させた重要なグループであること、2) 白亜紀前期にテチス区で栄えたガビオセラス亜科の祖先的グループが、やがて北太平洋区に移動し、セノマニアン期前期に局地的放散が起きたことなどを明らかにした。これらの成果は、1992年以降、Paleontological Research誌上ににおいて多数公表されている。

以上のように、重田君はフィールド調査を重んじ、何より一次データを基本とするオーソドックスな手法で、こつこつと研究成果を積み重ねてきた。このスタイルは、後に続く若手研究者へのひとつの規範となりうるものである。

日本古生物学会は、ここに重田康成君の努力と成果を高く評価し、学術賞を贈って今後の一層の発展を期待する。

田中源吾君：貝形虫類を中心とした節足動物の機能形態学的研究

田中源吾君の貝形虫に関する研究は汽水湖である中海・宍道湖周辺の現生貝形虫と環境との関連性を解明したことにはじまる。その後、東アジアに生息する*Loxococoncha*属貝形虫の系統分類学的研究を行い、特に海草や海藻類に生息する*L. japonica*種群に着目し、殻と生殖器の詳細な形態学的解析に基づき種間関係を解明した。さらに、化石記録の精査の結果を取り入れて、この種群の移動と種形成の様式を時空間的に復元し、異時性による進化が深く関わっていることを示唆した。この研究は高く評価され、2003年度日本古生物学会論文賞を受賞した。また、日本各地、特に中新世の貝形虫化石を研究し、これらの分類学的研究を通じて多くの新種を記載した。さらに、このような系統分類学的研究の成果をベースに、静岡大学の学位論文として貝形虫の眼の機能形態に関する研究に取り組んだ。貝形虫の眼は、クチクラレンズや網膜細胞、タペータム（凹面鏡）といった多くの光学系から構成されているが、集光能力値に大きく寄与しているクチクラレンズの厚さとレンズ前面の基準化曲率をパラメータとして選定し、その形態空間上に、実際の標本から得られた値や推定された集光能力値をプロットすることによって、実標本から得られた値と仮想形態空間内の値に整合性があることを認めた。また、実際の貝形虫の眼もクチクラレンズの厚さとレンズ前面の曲率によって集光能力を変化させていることを推定した。さらに、走光性実験および生体標本が採取された微小生息地の光強度と眼の形態の関係に関する実験を行い、これらの予測の妥当性を検証し、既存の分子系統樹上に形態空間で用いた眼の形質状態をプロットし、また、化石産出レンジ表を作成して以下のような結論を得た：1. 現在、海域で最も繁栄しているボドコビーダ貝形虫類は、そのほとんどが古生代では深海環境に生息し、レンズを発達させたものは皆無であった；2. 三疊紀初期に中位の集光能力のものが浅海環境に一斉に放散した；3. 弱い集光能力および強い集光能力のものはジュラ紀以降になってそれぞれ浅海および深海環境に出現した。以上の田中君の研究は、貝形虫の眼の進化は系統的小規模な構造的な制約を受けながらも様々な環境に適応した集光能力を持つ眼を発達させてきたことを初めて詳細に明らかにしたものであり、Zoological Journal of the Linnean Society誌に掲載され、国際的に高い評価を得た。

2008年から群馬県立自然史博物館主任学芸員となり、貝形虫化石群集に基づく古環境復元に関する研究や、系統分類学的研究を精力的に行い、数多くの成果を上げてきた。また、貝形虫のみならず、他の保存されにくい節足動物化石の眼などの構造にも焦点を当て、特に昆虫や十脚類の複眼化石を次々と発見し、中でもブラジルの白亜系サンタナ層の石灰質ノジュール中より、個眼の1つ1つまで三次元的に保存された十脚類の幼生の複眼化石を発見した。この複眼化石に関して、三角測量の方法で、SEMのステレオ画像から、各個眼面

の3次元座標を求め、法線ベクトルを各個眼の中心に移動させ、個眼一つ一つの光軸を球面投影することにより、化石の十脚類幼生が見ていた視野を推定した。この論文に対して、2010年日本動物学会からZoological Science AwardとFujii Awardが授与され、古生物学分野のみならず動物学分野からも高い評価を得ている。これらの機能形態学的研究以外にも、田中君は従来、研究が進んでいなかった日本を含めたアジア地域の古生代貝形虫および貝形虫に近縁な節足動物に関する記載分類学的研究も行っており、古生代におけるアジア地域の節足動物の進化と動物地理の解明に向けて研究を行っている。

このように、田中君は貝形虫はもちろん、昆虫類や十脚類などを含めた節足動物の機能形態、系統分類、および進化に関して古生物学的に検討するのみならず、様々な新しい実験や解析手法を取り入れ斬新な成果を次々とあげてきた。これらの研究成果はGeologyやGeophysical Research Lettersなどの著名な国際誌を中心に、約70編もの論文として出版されている。特にここ5年間で47編もの論文を書き、その精力的な研究成果には目をみはるものがある。

日本古生物学会は、田中源吾君のこれまでの古生物学に対する貢献と研究への努力を高く評価し、学術賞を贈って今後の一層の発展を期待する。

松原尚志君：新生代軟体動物の分類学的・古生物地理学的研究

松原尚志君の研究は、岩手県二戸地域に分布する下部中新統四ツ役層の軟体動物の研究にはじまる。この研究では、従来、門ノ沢動物群に含められながらもその実体が明確でなかった本層の軟体動物群の全容を明らかにし、3新種を含む28種の軟体動物の詳細な記載を行った。また、2つのタイプの群集を認め、その古生態学的特徴を明らかにした。さらに、四ツ役層の軟体動物群は、狭義の門ノ沢動物群とは同属異種からなること、およびArcid-Potamid群集の要素を欠いていることを示すとともに、種構成から、より時代の古い西南日本の明世動物群に対比できることを示した。この研究は1996年度日本古生物学会論文賞受賞論文となった。本研究に関連して、門ノ沢層から*Rexithaerus*属の新種記載を行い、本属が北太平洋東岸起源で前期中新世末に北太平洋西岸に分布を広げたことを明らかにした。また、近年ではマングローブ沼の示準化石である*Geloina*属や*Ellobium*属を門ノ沢層より報告し、前期中新世末～中期中新世初期に東北地方北部までマングローブ沼が北上していたことを示した。これらの成果はその後の花粉化石に関する共同研究の結果からも支持されている。

1997年4月に兵庫県立人と自然の博物館に赴任後、松原君は、淡路島の“中新統”神戸層群岩屋層からの*Ostrea*属の新種記載を嚆矢として、瀬戸内海東部沿岸地域に点在するいわゆる“瀬戸内中新統”から産出する軟体動物群について、石灰質ナンノ化石や渦鞭毛藻化石等に関する共同研究の結果も踏まえ再検討した。その結果、瀬戸内海東部沿岸に分布する兵庫県淡路島の神戸層群岩屋層、兵庫県神戸市の神戸層群多井畑層、岡山県の前島層や浪形層などから産出する軟体動物群が、定説となっていた前期～中期中新世ではなく、始新世～漸新世の動物群であることを明らかにした。この成果は、日本の古第三紀から新第三紀の古生物地理を見直すきっかけとなった。

これらの研究に加え、松原君は、岩手・青森県境の中新統舌崎層、高知県の鮮新統唐ノ浜層群、熊本県天草諸島の始新統白嶽層、青森県下北半島の鮮新統湯ノ小川層、兵庫県但馬地域の中新統北但層群産の軟体動物群を記載し、各動物群の種構成、年代、古生態、古生物地理学的特徴の解明に大きく貢献している。

また、松原君は、多くの軟体動物分類群について詳細な分類学的研究を行っている。二枚貝類では、*Yabepecten*属をはじめとするPectinidae科、Mactridae科、Veneridae科、Corbulidae科、腹足類では*Ocinebrellus*属、*Campanile*属など枚挙にいとまがない。最近では、東京大学総合研究博物館に所蔵されている新生代軟体動物化石のタイプ標本を精力的に再検討し、その図説は日本貝類学会の『ちりばたん』誌に14集まで掲載されている。その結果、上述した各地の動物群の研究成果とあわせ、1新亜属、20新種、4新置換名を提唱するに至っている。

松原君の研究手法の特徴は伝統的な形態分類学的手法に基づき、近縁種を含めた殻の各部位の形態を徹底的に比較解剖し分類を行っている点で、化石分類学者の一つの規範的研究姿勢であるといえる。これらの研究成果は65編もの論文として出版され、欧米や中国の学術論文および著書に引用されるなど海外からも高い評価を受けている。また、最近では、こうした高い評価を背景に海外の研究者との共同研究も積極的に推進している。

日本古生物学会は、松原尚志君のこれまでの古生物学に対する貢献と研究への努力を高く評価し、学術賞を贈って今後の一層の発展を期待する。

2012年度日本古生物学会論文賞

西田 梢君、中島 礼君、間嶋隆一君、疋田吉識君：Ontogenic changes in shell microstructures in the cold seep-associated bivalve, *Conchocele bisecta* (Bivalvia: Thyasiridae). Paleontological Research, vol. 15, no. 4, p. 193–212. (2011) (冷湧水性化学合成二枚貝オウナガイの貝殻微細構造変化)

オウナガイを含むハナシガイ類の多くは、化学合成二枚貝の主要なグループの一つで、深海の堆積物中に深く潜没して地下の硫化水素を取り込み、体内に共生するバクテリアからエネルギーを得ている。ハナシガイ類は、その起源がジュラ紀後期まで遡れることから、化学合成動物の進化を研究する上で重要な位置を占めていると同時に、現生軟体動物学者によって解剖学や生理学など多くの研究がなされてきた分類群でもある。しかしながら、その詳しい生態については深潜没生活者である故か研究例は少なく、現生生物学で得られた知見を貝殻という媒体を通して、地質学的な過去の環境解析や古生態復元に展開するための基盤情報を埋められないままの状況になっていた。特にオウナガイは、ハナシガイ類の中で顕著に大形化した種であり、生活史の視点から化学合成戦略者の進化を検討する上でまたとない材料である。

西田 梢君らは、冷湧水環境に生息するオウナガイについて、オホーツク海の水深400～450mから採取された現生遺骸殻と、稚内沖の海底で採取された半化石殻の双方について、アセテートピールによるレプリカ作成や走査型電子顕微鏡による詳細な観察を通して、貝殻微細構造の個体成長に伴う変化を詳細に記載し、成長前期と後期とで単一の殻層内で微細構造が変化することを明らかにした。殻表面を構成する球晶のサイズや微細構造の変化パターンを図示した一連の図版は明瞭で極めて分かりやすく、オウナガイの個体史を如実に物語る迫力に溢れている。また、球晶サイズが成長速度変化に対応し、さらに球晶サイズの変化が成長阻害輪と対応することを示し、成長後期には頻繁に殻成長が停止していた事実を微細構造と対応させた上で明らかにした。成熟に伴う成長遅滞を示唆したことは、化学合成二枚貝の進化を生活史や性成熟という視点で今後見直してゆく起点になるであろう。

従来、貝殻の微細構造は分類形質としての安定性から主として系統分類学の観点から研究されてきた。西田君らの研究

は個体成長に伴う微細構造の変化を明らかにすることで既存の見方を大きく転換させた。今後は、同位体分析などの地球化学的手法と組み合わせて、古環境変動や古生理学などの分野を相互にリンクさせることで、新たな展開の可能性を示唆する研究内容でもある。以上述べたように、本論文は地道で正確な観察・記載に基づき、独創的な進展を期待できる基礎研究と成っている点で際立っている。日本古生物学会は、著者らの努力とその成果を高く評価し、ここに論文賞を贈り、今後の一層の研究の発展を期待する。

千徳明日香君、江崎洋一君：Regularity in budding mode and resultant growth morphology of the azooxanthellate colonial scleractinian *Cyathelia axillaris*: effective and adaptive ways of utilizing habitat resources". *Paleontological Research*, vol. 16, no. 3, p. 252–259. (2012) (非造礁性群体六射サンゴ *Cyathelia axillaris* (フタリビワガライシ) の出芽の規則性と成長形態 - 生息環境に即した効率的な成長様式)

サンゴを含む刺胞動物門は、最も原始的な多細胞動物群の一つであり、後生動物の系統関係を論じる際にきわめて重要なグループである。サンゴ類は、単体型のみならず多くの群体型から構成される。そのうち非造礁性サンゴは、採餌により栄養物を獲得するため、成長形態が光の条件などの影響を受けにくい。そのため、サンゴの成長形態の内因的な規則性を見出すのに最適である。本論文では、樹状形態を呈する非造礁性群体六射サンゴ *Oculinidae* 科 *Cyathelia axillaris* (フタリビワガライシ) を対象とし、隔壁の出芽様式と成長形態との関連性を解明した。

フタリビワガライシは、1属1種からなり、有性生殖に由来する原個体から、出芽(無性生殖)により「二又分岐」を繰り返すことで樹状の形態をつくる。このとき、楕円形を呈する莖部の長軸方向に「方向隔壁」が存在するため、個体の方向性の認識が容易である。本研究により、出芽個体(モジュール個体)は、親個体の莖部短軸の両端に形成され、周囲に張り出した二次隔壁を自らの方向隔壁として引き継ぐことが明らかになった。同様の樹状形態の *Dendrophylliidae* 科に属する種では、出芽個体の方向隔壁は、親個体の成長方向に対してほぼ直交に配置する。これに対して、フタリビワガライシの場合、出芽個体の方向隔壁は親個体の成長方向と平行に配置するが、「出芽は方向隔壁の近傍からは生じない」という *Dendrophylliidae* 科に共通した出芽様式に従っていることもわかった。この規則性は、出芽の際に方向隔壁(隔膜)が極めて重要な指標として機能していることを示唆している。

また、非造礁性の樹状群体サンゴは、三次元的な成長形態を呈し、多方向からの効率的な採餌が可能である。本論文では、フタリビワガライシの場合、二又分岐という「ごく単純な二次元での分岐パターン」を採りつつも、「分岐時に分岐面を90度回転させる」という三次元的な形態を構築していることを指摘した。さらに、分岐後に親個体の成長は抑制され、出芽個体が利用可能な空間を確保できるようにして、採餌活動を行う個体数を飛躍的に増加させ、この出芽(モジュール)形成様式の規則性は、世代を超えて全出芽個体で普遍的に認められることを指摘した。

本論文では、非造礁性サンゴにおける「モジュールの形成様式や集合様式(群体形成様式)」の検討を通じ、それらの機能的・生態的な意味を理解することが可能であることを示した。また、そこで認められる群体形成の規則性や変異性を、生息環境などの側面から解明することで、サンゴの適応進化史を復元できる可能性を指摘している。このような現生群体サンゴの形成様式は、絶滅サンゴの「形態的な特徴や生態」あるいは「構造的な特性」を理解するための重要な鍵となる。

以上のように、本論文は、サンゴの骨格形成の規則性を明確にするとともに、群体形成のメカニズムに「普遍的な規則性」が存在することを示し、刺胞動物門のみならず他の群体性生物の「形づくりの解明」に寄与する可能性を示唆した優れた研究である。日本古生物学会は、著者らの努力と成果を高く評価し、論文賞を贈り、今後の一層の発展を期待する。

2012年度日本古生物学会貢献賞

太田正道殿：秋吉台・北九州における研究と普及活動

太田正道氏は、1960年に山口県秋芳町立秋吉台博物館の学芸員として勤務されて以来、1978年まで同博物館で研究・普及活動を行われた。その後、同年7月から北九州市立自然史博物館の準備室次長に赴任され、副館長、館長等を歴任し、1997年に定年退職された。退職後も2002年まで同自然史博物館で顧問を務められ、現在の北九州市立自然史・歴史博物館(いのちのたび博物館)の基礎を作った。このように、秋吉博物館で19年間、北九州自然史博物館で20年間(2002年度までの顧問であった期間も含めると23年間)、総計40年間の長きにわたり、博物館活動に従事し、古生物学の普及に尽力された。その活動は現在も続いている。

この間、山口県美祢市秋芳町にあった自宅を野外調査の宿舎として開放し、秋吉台を訪れた多くの古生物研究者の調査の便宜を図られ、秋吉台調査を行う研究者の支援や若い研究者の育成に大きな貢献を果たされた。

秋吉台では、小沢義明博士が「帰水」地域でフズリナ化石により逆転構造を発見して以来、地質構造に関して論争が行われていた。太田氏は、その論争に決着をつけるべくボーリング調査を行い、秋吉台の構造が逆転していることを証明した。この成果は、古生物学の歴史においても大きな貢献として評価されている。

以上のように、太田氏は、1960年以来40年以上にわたり博物館の学術活動を通して、秋吉台地域古生界の研究の進展と古生物学の普及のための活動に尽力された。日本古生物学会は、これまでの太田氏の長年の活動を高く評価し、ここに貢献賞を授与する。



学術・論文・貢献賞受賞者

前列左から松原尚志君(学術賞)、重田康成君(学術賞)、間嶋隆一会長、田中源吾君(学術賞)、太田正道氏(貢献賞)の代理の太田泰弘君、後列左から江崎洋一君(論文賞)、千徳明日香君(論文賞)、西田 梢君(論文賞)、中島 礼君(論文賞)、疋田吉識君(論文賞)

日本古生物学会2013年年会 (6月熊本大学) 優秀ポスター賞

服部創紀君

獸脚類における足機能の進化

増田智洋・鈴木雄太郎・大野悟志・椎野勇太君

遊泳性三葉虫 *Remopleurides* 複眼：転輪羅針儀機能発見か？

高木悠花・守屋和佳・石村豊穂・鈴木 淳・川幡穂高・平野弘道君

相模湾より得られた現生浮遊性有孔虫の成長段階別安定同位体比記録と水柱構造

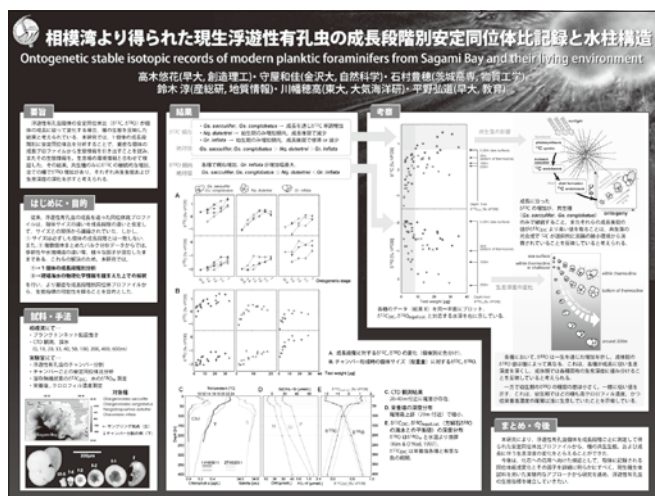


ポスター受賞者

左から服部創紀君，大路樹生会長，増田智洋君，高木悠花君



服部創紀君ポスター



高木悠花君ほかポスター



増田智洋君ほかポスター

日本古生物学会2013年年会 (6月熊本大学) 高校生ポスター賞

優秀賞

小田涼香君 (熊本県立第一高等学校) ほか
御船層群の古環境～火山豆石の形成過程～

奨励賞

竹井魁佑君 (熊本県立第一高等学校) ほか
阿蘇谷周辺の湧水や自噴井戸等の実態を探る

奨励賞

小夏広大君（東海大付属熊本星翔高等学校）・齊藤 凜君・濱崎しずく君（宇土市立鶴城中学校）
宇土半島の地質と古環境



高校生ポスター受賞者

大路樹生会長をはさんと、左側が熊本第一高等学校，右側が宇土市立鶴城中学校の皆さん

釀金者御芳名

- ・棚部一成
- ・Society of Vertebrate Paleontology
- ・小学館「大むかしの生物」著者
平野弘道，富田幸光，薮本美孝，大花民子，真鍋 真

平成24年4月1日～平成25年3月31日までの間に，上記の方々から本会へ釀金を賜りました．古生物学および本会の活性化のために有効に使わせていただきます．ご厚志に対し深く御礼を申し上げます．

釀金のための郵便振替口座番号は次の通りです．
00130-6-776553 日本古生物学会・釀金口

編集委員会より

87号からの4年間，編集長として「化石」の出版に携わって参りましたが，本94号を最後に，次号より前田新編集長をはじめとする新体制へとバトンを渡すこととなりました．これまで，種々の不手際等がありながらも大過なく編集長の重任を務められましたのは，ひとえに会員の皆様からのご投稿と編集委員の方々のご尽力のお陰です．本紙面を借りて厚く御礼申し上げます．思えばこの4年間，75周年記念号（88号）と震災特集号（93号）の出版，学会独自の電子ジャーナル配信，電子投稿受付開始，友の会コーナーの新設など，幾つかの標石を通過して参りました．3年後には100号の節目を迎え

ることになります．欧文誌Paleontological Researchが内外の研究成果を世界に発信する国際誌であるのに対して，邦文誌「化石」は会員による会員のための雑誌です．今後も会員の皆様のご協力を賜れますようお願い申し上げ，編集長退任の挨拶とさせていただきます．

（生形貴男）

4年間にわたり編集委員に携わりましたが，その間には古生物学会75周年記念行事や東日本大震災の特集など，大変に心に残る出来事がたくさんありました．今後とも，「化石」がますます発展することを心より祈念しています．

（佐藤慎一）

震災特集号が出版されたり，友の会向けのコーナーが作られたりして，「化石」の役割や雰囲気が変わってきました．欧文誌のPaleontological Researchとは一味違う，それでも日本古生物学会らしい雑誌になってほしいと思っております．生形編集長，お疲れ様でした！

（佐藤たまき）

「化石」編集部からのお知らせ

電子ジャーナル配信中

「化石」創刊号以降のコンテンツ（PDFは78号以降）を電子ジャーナルとして配信中です．電子ジャーナルのホームページは以下の通りです．

<http://www.soc.nii.ac.jp/psj5/fossils/Fossils.htm>

学会ウェブページの「化石」のページからもリンクが貼られています．出版後1年以内のコンテンツは会員限定で，パスワードがかけられています．各論文へのリンクをクリックするとパスワード入力用のダイアログボックスが現れますので，Paleontological Researchの電子ジャーナルのUser ID（パスワードの方ではないので注意）と同じ文字列を入力することでダウンロードできます．是非ご活用ください．

電子投稿受け付け中

現在，「化石」では，電子メールの添付書類での投稿を受け付けておりますので，積極的にご利用下さい．詳しくは，「化石」投稿規定第2条b項をご覧ください．

会員の皆様からの投稿をお持ちしております．

「化石」編集長 生形貴男

平成24年度一般会計決算・平成25年度一般会計予算

24年度収支計算書				25年度予算
平成24年 4月 1日から平成25年 3月31日まで				平成25年4月1日から 平成26年3月31日まで
日本古生物学会 一般会計	(単位:円)			
科 目	予算額	決算額	差 異	予算額
1. 事業活動収入				
会 費 収 入	8,850,000	9,080,180	-230,180	8,600,000
普通会員会費収入	5,000,000	4,920,000	80,000	4,500,000
特別会員会費収入	3,300,000	3,537,000	-237,000	3,500,000
賛助会員会費収入	135,000	135,000	0	135,000
外国会員会費収入	100,000	134,200	-34,200	100,000
英文誌購読会員会費収入	15,000	14,980	20	15,000
化石友の会会員会費収入	300,000	339,000	-39,000	350,000
事 業 収 入	2,775,000	3,869,656	-1,094,656	2,680,000
会誌等売上収入	1,270,000	1,736,486	-466,486	1,270,000
本冊売上収益	620,000	954,613	-334,613	700,000
超過ページ収益	50,000	0	50,000	50,000
電子ジャーナル収益	600,000	781,873	-181,873	700,000
広告料収入	345,000	360,000	-15,000	350,000
年会例会参加費収入	1,100,000	1,691,000	-591,000	1,000,000
特別号売上金	60,000	82,170	-22,170	60,000
補 助 金 等 収 入	400,000	0	400,000	0
研究成果公開促進費	400,000	0	400,000	0
寄 付 金 収 入	1,100,000	1,042,488	57,512	0
寄付金収入	1,100,000	1,042,488	57,512	0
雑 収 入	187,000	283,467	-96,467	210,000
受取利息収入	17,000	2,126	14,874	10,000
雑収入	170,000	281,341	-111,341	200,000
前 期 損 益 修 正 益	0	0	0	400,000
過 年 度 修 正 益	100,000	100,000	0	0
事業活動収入計	13,412,000	14,375,791	-963,791	11,890,000
2. 事業活動支出				
事 業 費 支 出	10,010,000	9,478,572	531,428	9,600,000
会誌発行費	3,650,000	3,730,335	-80,335	3,950,000
本冊印刷費	3,500,000	3,555,735	-55,735	3,800,000
別刷印刷費	150,000	174,600	-24,600	150,000
会誌送料	700,000	671,997	28,003	700,000
通信運搬費	500,000	582,058	-82,058	500,000
諸印刷費	850,000	745,132	104,868	850,000
研究委員会等助成金	1,500,000	790,688	709,312	1,500,000
編集費	1,100,000	1,399,022	-299,022	500,000
年会例会開催費	600,000	547,863	52,137	800,000
普及講演会開催費	400,000	400,000	0	0
地球惑星科学連合年会費	0	10,000	-10,000	10,000
I P A会費	30,000	20,217	9,783	30,000
自然史学会連合分担金	20,000	20,000	0	20,000
日本分類学会連合分担金	10,000	10,000	0	10,000
賞関係費	50,000	65,810	-15,810	50,000
学会図書整備費	100,000	19,000	81,000	50,000
データベース作成費	400,000	366,450	33,550	450,000
地学オリンピック分担金	100,000	100,000	0	100,000
寄付金	0	0	0	80,000
管 理 費 支 出	3,450,000	3,499,070	-49,070	3,895,970
業務委託費	1,300,000	1,307,016	-7,016	1,500,000
謝金	300,000	262,500	37,500	350,000
消耗品費	100,000	56,632	43,368	50,000
賃借料	400,000	360,000	40,000	400,000
水道光熱費	50,000	36,000	14,000	50,000
会員データ管理費	100,000	0	100,000	95,970
旅費交通費	1,000,000	1,337,176	-337,176	1,300,000
雑費	200,000	139,746	60,254	150,000
送金振替手数料	100,000	52,821	47,179	50,000
その他	100,000	86,925	13,075	100,000
その他の事業活動支出	3,157,028	0	3,157,028	2,995,613
その他の事業活動支出	3,157,028	0	3,157,028	2,995,613
学会基金繰入支出	0	1,601,594	-1,601,594	0
事業活動支出計	16,617,028	14,579,236	2,037,792	16,491,583
事業活動収支差額	-3,205,028	-203,445	-3,001,583	-4,601,583
積立預金収入	0	1,600,000	-1,600,000	0
当期収支差額	-3,205,028	1,396,555	-4,601,583	-4,601,583
前期繰越収支差額	3,205,028	3,205,028	0	4,601,583
次期繰越収支差額	0	4,601,583	-4,601,583	0